

日風園

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第83号 2013年10月1日

資料見聞

葬りの大甕はぶ — 高知市・円満寺跡出土の備前大甕 —

岡本 桂典

高知城の西多聞の暗い部屋に県立歴史民俗資料館が開館する前年の平成2年まで備前焼の大甕が収蔵されていた。収蔵された資料のある隣の部屋は、2人の夜警の警備さんが泊まる部屋でした。この警備さん達が、風のあ

る日にはこの大甕が「ヒュー」と音をたて、気味が悪いと当時、笑っていたことを覚えています。さて、この備前焼の大甕はどこから出土したものでしょうか。どうもこの大甕、高知城懐徳館に昭和56年（一九八一）に展示されていたようです。その事を物語る展示解説の紙が偶然にも残されて



高知市桜馬場円満寺跡から出土した備前焼の大甕(昭和33年)

れています。それには「カメの棺昭和三十三年十月九日高知市桜馬場、もと円満寺跡墓地にて發掘、高知城築城奉行 百々越前守安行、甥、百々勘左衛門直治妻堀氏」

「東海寺澤庵和尚の姪 歿年 明暦元年（一六五五）七月二十五日（昭和五十六年より三百二十六年前）七十六歳」とあり出土地点についても記されています。ところが、岡

山県立博物館で昭和54

年10月9日～11月4日まで開催された『特別展 備前焼—その流通と時代的特色—』の図録の40頁に「③大甕高知市越前町刑務所跡出土 高知城保管

h・1000（mm）」と写真付きで紹介されています。図録の「備前焼の分布と器種」の項には「備前焼出土は、備前焼の歴史とその流通過程の解明に主眼が置かれた展示で、当時注目され始めた水中考古学の成果も取り上げています。既に、この時期に高知県と岡山県立博物館は学術的な交流があったのです。さて、この大甕にはもう一つ展示解説のパネルが付随していました。それは「当時の高知新聞ニュース」と題した発見当時の『高知新聞』の記事の写真を貼ったものです。新聞記事の日付は「昭和33年10月10日」記事のタイトルは「300年前土葬のカメを發掘／高知市／越前守妻女の棺？当時の埋葬形式裏づけ」として掲載されています。記事を見るとかつては高知刑務所官舎の裏になる所に墓標が存在していたこと、墓標があった所から大甕の口縁部がすでに顔を見せていたことがわかります。発見時は、考古学者ではなく民俗学者故桂井和雄氏が立ち会っていたことや、大甕に埋葬された人骨・櫛・盃・蓋と思われるものが出土していたことが写真よりわかり、既に口縁部の約1/4が割れていたこともわかります。備前焼の甕を棺に転用した例は多くみられます。この大甕は16世紀末～17世紀初頭ころかと思われ

特別展 備前焼 ―薪と炎が織りなす土の美―

平成25年10月19日(土)～12月8日(日) 会場：高知県立歴史民俗資料館3階総合展示室

岡本 桂典
曾我 満子

第1章 日常容器の世界

―つぼ・かめ・すりばち―

能していただければと思います。この特別展では関連企画(8頁参照)も用意しております。

備前は、摂津・和泉・讃岐などにも『延喜式』にも記された須恵器の貢進国として知られ、その主な生産地は邑久郡にあります。6世紀から7世紀にかけての窯跡は瀬戸市牛窓町、邑久町、長船町などで確認されています。その一つ寒風古窯跡群は国史跡となっています。平安時代後期には、窯は長船町の東北部に移動し、油杉窯跡などで生産が継続されました。平安時代の終わり頃には、山を一つ越えた備前市伊部に築窯されるようになります。

油杉窯跡からは、須恵器の双耳瓶(高さ35.8cm)が出土しています。備前焼の起源を考える上で重要な資料です。(※以下写真説明に所蔵者明記のないものは、岡山県立博物館蔵です。)



須恵器双耳瓶 瀬戸市内市油杉窯跡 平安時代

備前焼は須恵器の伝統をもとに成立

平成24年度から始まった岡山県立博物館との文化交流事業は、今年で2年目を迎えることとなりました。昨年度は当館で「特別展 刀 武士の魂―備前の名刀と土佐ゆかりの刀剣―」、岡山県立博物館では「坂本龍馬と幕末の土佐」を開催しました。

本年度は、秋に「特別展 備前焼―薪と炎が織りなす土の美―」を開催します。来年、岡山県立博物館では元日より2月16日まで「土佐の水とくらし―四万十川の漁を中心に―」の開催を予定しています。

備前国は山陽道の一つで、現在の岡山県東南部にあたります。備前国では平安時代から優れた刀工を輩出し、刀は備前物と呼ばれ、重んじられました。また、平安時代の終わり頃から伊部で生産が始まり、後に各地に流通、生活を支えたものに備前焼があります。備前焼は、瀬戸や常滑などとともにも古く窯の一つに数えられ、茶器は戦国武将にも好まれました。

さて、備前焼という名称はいつ頃から用いられていたのでしょうか。まず、

室町時代の史料をみてみることにします。公家の山科教言が書いた日記『教言卿記』の応永13年(1406)の記事には、「備前茶壺」とみえ、「備前茶壺」を二度購入したことが記されています。このことは、京都において備前の名が知られていたことを示しています。応永24年(1417)以降の成立とされる『桂川地蔵記』には「茶具足者」として、「香香登 信樂 瀬戸壺ニハ」とみえています。「香香登」は「香登」のことで、伊部が香登荘に位置していたことから、備前焼を香香登(「かがつ」、「かがち」とも称していました。その後、茶会の日時・場所・道具立てなどを記した茶会記に「備前」の名がみられるようになり、徐々に中央でその名が浸透していったと考えられています。

備前焼の主要な生産地は、岡山県東南部に位置する備前市伊部です。この伊部で生産が盛んなことから別名「伊部焼」とも呼ばれています。江戸時代の地元の記録によれば備前という名称より、「伊部焼物」と称さ

れ、この名称が地元岡山では長く用いられていました。1930年代後半から1940年代にかけて「備前」と「伊部」の両者が用いられていたようですが、第2次世界大戦後に全国的に備前焼の名称が普及したといわれています。備前焼は、基本的に釉薬を用いず、焼き締め技法を受け継ぎ、現代に至っています。この備前焼の生産地にある岡山県立博物館は、多数の備前焼のコレクションを所蔵しています。本展では、岡山県立博物館他のご協力のもと、備前焼の歴史をたどりながら、その優品を左記の4章立てで紹介いたします。

- ・第1章 「日常容器の世界―つぼ・かめ・すりばち―」
- ・第2章 「土佐にきた備前焼」
- ・第3章 「美と技を求めて―徳利・お茶・細工―」
- ・第4章 「重要無形文化財保持者(人間国宝)の作品」

高知ではほとんど公開されたことのない備前焼が一堂に展示されます。備前焼の特色である土の味わい、炎が生み出す偶然の変化、そして機能美も堪

したと考えられており、初期の備前焼は須恵器の雰囲気を残しています。生産されたものは坏、碗、鉢、甕、甕、瓦などで、鎌倉時代中頃までは、備前焼は主に備前国内で流通していました。鎌倉時代後期には、日常容器の壺・甕・挿鉢を主に生産するようになります。この時期のものは、須恵器と同様に還元炎焼成（途中から酸素の供給を断って焼成）のため、器肌は灰色をなし、まだ備前焼特有の赤褐色とはなっていません。この時期のものには、口縁部は軽く折り返して丸くふくらませた小さな玉縁になっているものが見られます。



甕 鎌倉時代

中世には、地方でも市が発達してきます。市では色々なものが売買されています。市の様子は描いた絵巻物で有名なものに『一遍上人絵伝』があります。その中に備前福岡の市の様子を描いた場面があります。魚や穀物が売買され、甕が並んでいる様子もみえます。この甕は備前の甕といわれ、その



『一遍上人絵伝』巻四（複製・部分） 原本 国宝
清浄光寺・歎喜光寺蔵 正安元（1299）年

流通を知る上で貴重な資料となっています。この時代は海運が発達しており、物資輸送は陸路だけではなく船を使っていました。そのことを物語るように瀬戸内海では網にかかった備前焼を引き上げることがありました。昭和51年（1976）秋には水中写真家により海中に沈む備前焼が偶然に見えられました。その場所は香川県小豆島の東



挿鉢 室町時代
水ノ子岩海底遺跡 カキの貝殻が付着しています

方約6kmに位置する岩礁で置かれた。この発見場所は水ノ子岩海底遺跡と呼ばれ、翌年に調査が行われ、鉢・壺・甕類など210個体が

確認されました。それらは、岡山県立博物館の収蔵品となっています。室町時代のはじめの頃、備前焼を載せた船が瀬戸内海を航行中、水ノ子岩で沈没したと考えられます。引き上げられた備前焼には、貝殻などが付着していました。長い眠りから覚め、海から引き上げられた「海上（揚）り備前」なども展示します。

備前焼の中には年号などを記したものがありません。岡山県赤磐市千光寺の壺（高さ62.8cm）肩部には「石井原山之橋本坊之 常住物也 歳次 福安元



壺（古備前四耳大壺）
福（文）安元（1444）年銘
国指定重要文化財 赤磐市千光寺蔵

年三月廿三日 甲子 作者伊部村之釣井衛門太郎（花押）」と銘文があります。石井原山は現在ご所蔵の寺の山号です。「福安」は私年号で、文安元年（1444）にあたると思われます。この年に伊部村で製作され、工人の名もわかりません。仏具として用いられる備前焼花瓶も寺に寄進されています。高さは約50〜60cmの大きなもので、口縁はラッパ

状に大きく開き、中国明代の青磁の花瓶にみられるような形をしています。永正9年（1512）と永祿12年（1569）の紀年銘を有する花瓶です。これらは瀬戸内市静円寺に伝世されたものです。



花瓶（静円寺永正銘備前焼花瓶）
永正九（1512）年銘 岡山県指定重要文化財
瀬戸内市静円寺光明院蔵

第2章 土佐にきた備前焼

南北朝時代以降、西日本を中心に広範囲に流通した備前焼は、土佐にも搬入されています。土佐に搬入され、各地にもたらされた備前焼は、発掘調査などで出土する資料と民家・神社などに伝世されたものがあります。

さて、土佐における備前焼の考古学的な研究は、1960年以前に遡ります。備前焼の出土する遺跡は、集落跡・城跡・墓・銭貨埋納遺跡などが報告されています。備前焼が人間の生から死後の世界まで支えていたことが理解されます。最近、唯一、発掘調査で確認された銭貨埋納遺跡がいの町天神

溝田遺跡の河川流域で見つかっています。それは15世紀代の備前焼壺に銭貨393枚と土師質土器やアワなどが納められ、和鏡も出土しました。埋納銭の容器として備前焼が用いられた出土例が増えることになりました。



銭貨などを納めた備前壺
いの町天神溝田遺跡 高知県立埋蔵文化財センター提供

愛媛県との県境の標高600〜700mに位置する山間部、いの町本川には、15世紀代の甕などが伝世しています。今回の調査で甕について縄紐の痕跡を確認し、今後その用途が推測できる可能性がでてきました。この章では1頁でも述べたように、土佐にもたらされた備前焼を紹介し、どのように使われたのかも考えてみたいと思います。

第3章

美と技を求めて
―徳利・お茶・細工―

日常の容器として、重宝されてきた備前焼ですが、茶の湯の影響を受け、

新たな展開をみせます。侘び・寂びといった日本独自の美意識にかなったやきものとして茶陶において重要な位置を占めることとなりました。安土・桃山時代前後の茶会記の記録から備前焼の建水、水指、花生などが度々用いられたことがわかります。歪み、大胆な造形が、当時の茶の湯をリードした古



花入(耳付)
安土・桃山時代

田織部(1544〜1615)の好みを反映したともいわれ、この時期の備前焼の美術史上における価値を高めています。

茶碗銘「只今」は生まれ故郷の岡山県へ帰ってきたということで、この銘があります。茶碗は側面からみるとわかりづらいですが、真上から見ると大



茶碗 銘「只今」
安土・桃山時代 岡山後楽園蔵

きく歪んだ杳茶碗となっています。内面には轆轤回転の痕が残っています。側面は細かく削って整えた後、楡垣模様を付けており、手間をかけた作品となっています。自然釉がかかる、表情豊かな胴部と光沢の無い、赤褐色の高台から腰の部分の両者の質感・色調の差異も見所です。

また、白い器肌と赤い筋のコントラストが美しい「ヒダスキ」の徳利、「ボタモチ」と呼ばれる黄色の自然釉の抜けが表情を添えている手



手鉢 安土・桃山時代

鉢・額鉢も器に華やぎを与え、見応えがあります。これらの窯変は、元は作品の窯詰め効率を考えて、重ね焼きをしたことから生まれました。江戸時代以降は、壺・甕・播鉢に加えて、様々なものを作るようになり、徳利や細工物などにその技術を結集していきました。

第4章

重要無形文化財保持者
(人間国宝)の作品

明治時代、藩の保護を失うとともに、人々の関心は欧風文化に向けられるよ

うになり、備前焼の生産規模が縮小されていきました。この頃の主要生産品は土管でした。備前焼受難の時代でも創意工夫で苦境を乗り切ろうとしました。その後、備前焼が再評価を受けるのは昭和30年代以降です。昭和31年(1956)には、金重陶陽(1896〜1967)が重要無形文化財保持者に認定されました。細工物の陶工として知られていましたが、安土・桃山時代の備前焼を観察し、試行錯誤の末、表情豊かな桃山の茶陶の再現を行い、「備前焼中興の祖」と呼ばれました。



伊勢崎淳 角花生 2009年

今回、人間国宝に指定された
藤原 啓 (1899〜1983)
山本陶秀 (1906〜1994)
藤原 雄 (1932〜2001)
伊勢崎淳 (1936〜)
の各作家の作品もご紹介します。

備前焼人間国宝伊勢崎淳先生には、今回特別展開連講演会で、「備前焼その伝統と創造」と題し、12月1日(日)14時より講演(先着100名、要予約)をいただくことになっています。

長宗我部元親の

詠んだ和歌

岡豊城主・長宗我部元親は、文学・芸能に高い関心を持っていました。なかでも和歌に対しては強いこだわりがあったようで、永祿4年（1561）、岡豊城の鬼門を守る岡豊別宮八幡宮に三十六歌仙の扁額を奉納しています。

天正16年（1588）4月14日、諸大名と公家を招集して行われた後陽成天皇の聚楽第行幸は、豊臣秀吉が天皇の信任を得た「天下人」であることを全国に喧伝するための一大セレモニーでした。

その2日後の宴の席で、天皇や秀吉など98名の参加者が和歌を詠みましたが、任官したばかりの元親もその場への列席を許されています。そして、「松の祝いに詠み寄る」という題で詠んだのが左の和歌です。

因詠寄松祝和歌

侍従秦元親

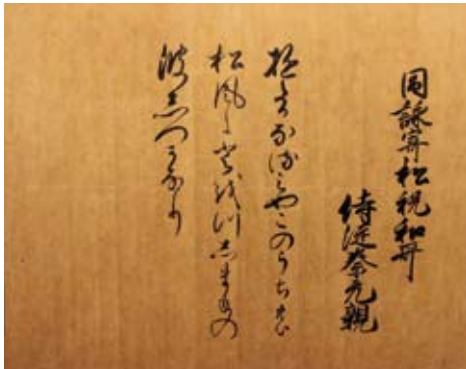
ゆたかなるミヤこのうちの
松風にとつしまねの
なみしつかなり

本歌の趣旨は、「豊臣が支える都（天皇・朝廷）の権威によって国内が安定する」ということのようにですが、元親の複雑な思い

が込められている気がします。

というのも、本歌の署名部に注目してみてください。秀吉の推挙により「（土佐）侍従」に任官したとはいえ、服属したばかりの元親は、このハレの場で最末席の扱いしかも「豊臣」姓も与えられていなかったことが分かります。この時点で秀吉との距離が感じられる点は見逃せません。

左の資料は、伏見稲荷大社の旧蔵品で、最近当館に収蔵されました。『聚楽行幸記』諸大名詠歌部分の最末尾（元親詠歌部分）のみを筆写したものと考えられます。写本とはいえ、和歌に込められた元親の心情を推察できる貴重な資料といえるでしょう。（野本）



※秦は長宗我部氏の本姓です。

ボランティアの交流

当館は3年間にわたり岡山県立博物館と文化交流事業を行なっています。その一環としてのボランティアの交流をご紹介します。

1年目の昨年度は、当館開催の「刀剣展」を見学するため10月11日に岡山県博の友の会とボランティアのみなさんがお越しください、当館のボランティア（カルチャーサポーター）との顔合わせの交流会が行なわれました。

1月26日には、岡山県博の「龍馬展」の龍馬のメタルフィギュア作りのサポートに当館のカルサポが加わりました。他館のワークショップに参加して良い勉強になりましたし、また、その



四万十川の沈下橋を見学
四万十町一斗俵 2013年8月18日

後の交流会の温かいおもてなしに一堂感激して帰路に着いたことでした。

2年目の今年度は、岡山県博のボランティアのみなさんが「備前焼展」の展示解説をするため11月24日に来てくださいます。当館のカルサポはワークショップのサポートが主ですが、来年1月1日からの岡山県博の「土佐の水と暮らし展」開催に合わせて四万十川について語れるようになろうというご意見が打ち合わせ会で出ました。そのためこの間、四万十川へ現地研修に出掛けました。屋形船で四万十川の柴漬け漁や投網を見学する際には、岡山県博の友の会とボランティアのみなさんが合流してくださいました。

岡山県博との交流によってカルサポの活動が広がっています。（中村）



柴漬け漁を見せてくれた川漁師さん
四万十市 四万十大橋付近 2013年8月19日

考古

考古学者斎藤忠博士と高知

私が学生の時から常に紐解いている書の一つに昭和49年（1974）8月に刊行された『日本考古学史』日本歴史叢書34（吉川弘文館、平成7年10月新装版刊行）があります。著者は、日本考古学の最長老である大正大学名誉教授の斎藤忠博士です。その先生が、平成25年7月21日に104歳で逝去されました。先生は、明治41年に北海道でお生まれになりました。宮城県仙台に移られ、東京帝国大学を卒業、東京大学教授、大正大学教授などを勤められ、白寿を迎えてからも著書の執筆などをなされていました。

斎藤先生は、昭和32年（1957）12月に高知大学人文学部の講師として考古学概説を講じられています。その時に香美市土佐山田町龍河洞洞穴遺跡を訪れ、石灰華に包まれた弥生土器をみて歌を詠まれています。先生には学生時代からご指導頂いておりましたが、故郷にもどった後も先生の調査に同行させて頂くという機会にも恵まれました。それは平成9年（1997）7月10・11日（木・金）のことでした。この時、先生は中国五台山竹林寺の研究をされていた時で、調査のために四国霊場第31番札所五台山竹林寺の調査に来られました。空港から直接竹林寺に調査に入られ、竹林寺のご住職のご協力のもと調査をされました。



中国五台山竹林寺の研究
当日は埋蔵文化財センターも訪れ、翌日は当館で寺石正路氏の考古学史関係の資料を閲覧されました。

（岡本）

歴史

「高知の歴史」を学ぶ楽しさ

9月1日まで開催していた企画展「江戸時代の南国―地域資料にみる人々のくらし―」の準備のため、この数ヶ月、近世文書を集中的に読む機会に恵まれました。昨年度から高知に来た私にとっては、土佐の近世文書に触れるのは初めてのことに。これまで関西で様々な古文書を扱っていたので、それほど不安はなかったのですが、いざ読み始めて愕然。面積の単位や身分の呼称などの慣習・制度の違いは勿論、古文書の文章や漢字の用い方など様々な違いに阻まれ、全く思うように読めなかつたのです。

例えば、一般的には面積の単位は町・反・畝・歩などが使われますが、土佐では畝の代わりに「代」が使われます。また、地下浪人や間人という独特の身分があったり、関所のことを道番所、宿駅のことを送番所と言ったり。庄屋に転勤があるというのにも驚きました。土地勘のなさも加わって、今までの知識とつき合わせながらこの解読作業は決して容易ではありませんでした。

この驚きの一部は、展示室内の「こうちくんのこれってこうちだけ!?!」というパネルで紹介していました。学校で学ぶのは全国的な歴史ですし、ずっと高知にいると他の地域との違いを意識することもあまりないのではないでしようか。他との比較を通して、一般的な歴史だけでなく「高知の歴史」を学ぶ楽しさをお伝えできていればと思います。（大黒）



▲展示室内に設置したパネル

民俗

七夕馬の里をたずねて

旧暦7月7日に越知町・仁淀川町・津野町の七夕飾りを見てまわりました。

来年1月2日からの企画展「おもちゃの牧場―干支の馬―」では山崎茂さんの寄贈コレクションを中心に全国各地の馬の郷土玩具を展示しますが、あわせて岩手県のチャグチャグ馬コなど馬が登場する祭りや行事をパネルでご紹介したいと考えています。

各地の祭礼には美しい馬具を身にまとった飾り馬が登場します。また、七夕行事には素朴な藁馬がみられます。山崎さんのコレクションにも高知県の藁馬が1点収集されています。

そこで、七夕行脚にでかけました。カルチャーサポートの調査成果などを活用させてもらい、七夕馬が飾られる地域を中心に10ヶ所ほど訪ねました。津野町織合では地元の有志が復活させて40年ぶりに今年も元の位置に飾ったという七夕馬に出会いました。同展ではこうした七夕馬をパネルにご覧いただこうと思っております。（中村）



谷をわたる七夕馬 越知町桐見川 2013年8月13日



「土佐異界談義」
盛會に終わる

7月27・28日、総合研究大学院大学／国立歴史民俗博物館の公開講演と学術セミナー「土佐異界談義」が開催されました。当館は奥物部ふれあいプラザを会場にした第2部「山村の宗教者と呪術ーいざなぎ流を考えるー」を共催。小池淳一教授が日本各地の神楽祭文について、梅野が物部の妖怪伝承といざなぎ流の呪術について報告し、常光徹教授を交えて議論しました。専門的な内容にも関わらず多くの方に参加して頂きました。

12月7日には京都で陰陽道といざなぎ流のシンポジウムを開催予定です。(梅野)



東洋町役場での調印式



川口地区での聞き取り調査

7月1日、東洋町所有の民俗資料の共同調査に関する協定が、東洋町と高知県立大学文化学部、そして当館の間で締結されました。平成21年以来、県立大と当館は、東洋町が保管する約1千点の民俗資料(民具)の調査整理に取り組んでいます。今年も7月13日～15日の3日間、県立大橋尾直和教授と学生13名とともに調査を行いました。地域のお年寄りへの聞き取り調査では、民具の使い方をはじめ、大敷網や海士漁、太刀踊りや盆行事等さまざまなお話を聞くことができました。(梅野)

東洋町・県立大学と協定を締結、民具調査おおいに進む



線香花火大会で盛り上がった夏

8月18日(日)第3回「岡豊山の夏祭り」を開催しました。岡豊地区周辺住民の方にもご協力いただき、「夏休みもの作り教室」、「美味いもん屋台」、「昔ながらの縁日」などを行うことができました。今年も職員手作りのお客様にご来場いただきました。今年も職員手作りのお客様敷は好評で笑いと涙があふれました。イベントの最後は毎年恒例の、大線香花火大会が行われ、大人も子どもも一緒に盛り上がりました。(濱田愛)



歴史講座
『城』

昨年引き続き、今年も宅間一之顧問が講師を務める歴史講座を開催しております。今年の講座テーマは『城』。毎回、100名近くの受講生に参加いただいております。また、10月からは、3回にわたり、高知城の現地学習も予定しております。引き続き、皆様のご参加をお待ちしております。(西野)

講座日程(6月～9月は終了)

- 10月12日(土) ※高知城 現地学習Ⅰ
- 11月30日(土) ※高知城 現地学習Ⅱ
- 12月14日(土) ※高知城 現地学習Ⅲ
- 1月11日(土)

カルチャーサポーター募集中

歴史館では学校団体の体験学習やワクワクワークなど、さまざまな活動のサポートをしていただくボランティア「カルチャーサポーター」を募集しています。ぜひご参加ください。



昔の遊びを伝えよう
カキ大将にかえった
ようやねえ



参加者をサポートするには手前に自分やってみることも大事やね



障子の上下をさかさまにして上から貼りゆう
昔の人の知恵には
うんと教えられる

東京写真月間 2013巡回展

2013年11月19日(火)～26日(火)

3階総合展示室 臨時閉室のお知らせ

2013年10月10日(木)～10月18日(金)
12月9日(月)～12月16日(月)

- 3階総合展示室は特別展「備前焼-薪と炎が織りなす土の美-」展示替えのため上記の期間、閉室いたします。
- 2階長宗我部展示室は、ご覧いただけます。上記期間の観覧料は250円(大人)です。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第83号
平成25年10月1日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 高知県立歴史民俗資料館
南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 088(862)2211
FAX 088(862)2110
午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 通常期常設展 大人(18才以上) 450円・団体(20人以上) 360円
(特別展・企画常設展示込 500円)
無料…高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成25年 10月～12月の催し

特別展

平成25年度 高知・岡山文化交流事業Ⅱ
平成25年度 第63回高知県芸術祭共催行事

備前焼 -薪と炎が織りなす土の美-

2013年
10月19日(土)～12月8日(日)

会場: 当館3階総合展示室

観覧料: 大人500円 無料: 高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者

岡山県立博物館などが所蔵する備前焼の優品を3階総合展示室で展示します。また、土佐に流通した備前焼も伝世品・出土品を中心に紹介します。



德利(蕪形)
安土・桃山時代 岡山県立博物館蔵

関連行事

講演会

●電話等で要予約(先着100名) 観覧料要

12月1日(日) 14:00～15:30

「備前焼『その伝統と創造』」 講師: 備前焼人間国宝 伊勢崎 淳氏

講座

●電話等で要予約(先着各100名) 観覧料要

11月2日(土) 14:00～15:30

「備前焼の世界」 講師: 岡山県立博物館学芸員(主任) 重根弘和 氏

11月16日(土) 14:00～15:30

「土佐国に流通した備前焼について」

講師: 高知県立埋蔵文化財センター 吉成承三 氏

ワクワクワーク

●電話等で要予約(先着25名) 観覧料要

11月30日(土) 13:00～15:00(参加費用: 1,000円程度)

「備前焼で干支のグッズをつくろう」 講師: 協同組合岡山県備前焼陶友会

岡山県立博物館のボランティアガイドによる説明

11月24日(日) 11:00～、13:30～

展示室トーク

●予約不要・観覧料要(講師: 担当学芸員)

10月26日(土) 14:00～15:00 11月9日(土) 14:00～15:00

予告

冬期企画展

おもちゃの牧場 -干支の馬-

2014年1月2日(木)～3月9日(日)

山崎茂さんの郷土玩具コレクションを中心に、干支にちなんだ馬のおもちゃを展示します。八幡駒(青森県)やチンチン馬グラー(沖縄県)など日本各地の個性的な馬の郷土玩具が勢揃いします。



安芸土鈴(高知県)

展示室トーク

●予約不要・観覧券要(講師: 担当学芸員)

1月11日(土)・1月18日(土) いずれも14:00～14:30



プレ企画

ワクワクワーク

土佐和紙雁皮張り子 童子乗り馬の絵付

講師: 草流舎のみなさん

(定員30名・参加費要 事前申込み要)

2013年11月23日(祝・土) 14:00～15:30

コーナー展

おひなさま

雛独楽
(福岡県)



2014年2月2日(日)～3月16日(日)